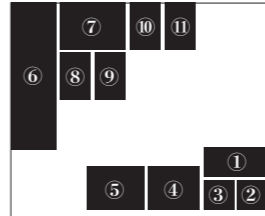


地方祭、二百年の先へ。

東温の獅子舞の起源は200年以上前に遡る。青年団や若い農業者を中心に普及し、今日まで伝えられてきた。時は過ぎ2020年、新型コロナウイルス感染症が世界に猛威を振るい、イベントや伝統行事は相次いで自粛。生活は一変した。感染拡大から1年半。秋晴れの空に懐かしい音色が戻り始める。10月10日、頭を垂れる稲穂が広がる景色の中で地方祭が催された。伝統を絶やさぬよう当日を迎えた各地の様子を、カメラが記録する。



1_ 鯉口に身を包み境内に集まる北方社中会の皆さん／2_ 装飾には「愛祭一家」の4文字。地域全体が家族だ／3_ 神事を終えた神輿を宮出／4_ 市指定天然記念物のクスノキがそびえ立つ揚神社／5_ 北方社中会の松本司さん。晴天の中でこの笑顔／6_ 観覧者は2年ぶりの神楽を静かに見守った／7_ 北方獅子舞保存会の皆さん／8_ 戻ってきた祭の風景は言葉では表現できなかった／9_ 豊作の稲穂が広がる中を神輿が進む／10_ 北方東公民館前で神輿が上がり、勇壮な姿を見せた／11_ 北方社中会の旗は揚の里の風で静かになびいていた



「コロナを正しく恐れ、立ち向かう力になるようなお祭り。この揚の里がますます栄え、ふるさとづくりにつながるお祭りになることを願う」
宮司の言葉に耳を傾けて神輿を囲むように座る北方社中会の皆さん。静かな境内には爽やかな風が吹いていた。境内横では北方獅子舞保存会の顔ぶれが出番を待つ。揚神社で獅子を演じたのは、向井大輔さん(39)と村上和彌さん(36)だ。
「イベントがない昨年は書物の見直しや、獅子や太鼓の修繕で終えまし

た。少しでもできるのとできないのとは違います。どんな形であれ、やっぱり獅子は良いですね」。演じた直後、向井さんは眩しい笑顔を見せた。
北方では開催に向けて感染対策を強化。参加者も限定し、広い呼びかけも無くした。噂を聞きつけ境内に集まった観覧者は、久しぶりの獅子を待ちわびた。
演目は神楽のみ。早く小気味良い太鼓の音が響くと、2年ぶりの獅子に観覧者の目は奪われた。
「どこか生活にもメリハリがなくなっていました。舞の最中、視界はありませんが、皆さんから届く声援に元気をもらいました」と話す村上さん。流れる爽やかな汗を拭った。

感無量。祭りへの想いは言葉では綴れない

獅子舞の継承は大部分が口伝によるもので、披露の場がないと獅子舞自体を知る機会がなくなる。「来年コロナが落ち着くことを願って、多くの場所に行き、多くの人に獅子舞を知ってもらう機会を増やしたい。若い人たちが出て行くのは仕方ないと思う。時代にあったでできることを模索しながら伝統を絶やさず、活動を続けたい」と話す2人。舞殿から獅子が去ると、会場からは惜しみない拍手が送られた。時代の困難に遭いながらも、北方の獅子舞は揚の里に住む人々の心に刻みこまれている。

「獅子を見るだけでも熱いものが込み上がります」と話す北方社中会の松本司さん(38)は新年の抱負に「僕たちの祭りはもう始まっている」と記した。「全員で神輿を担ぐ。一つのことに向かっていくこの一体感こそ、祭りの醍醐味っていうのかな」。言葉では覆いきれない喜びは、笑顔だけで感じ取れた。この日確かに、2000年続く伝統は受け継がれた。

北方 Kitagata





三好 真和さん

牛 渚地区は、大人だけでなく子どもにとっても祭りへの思いは強い。「去年よりも状況は厳しく、秋祭りの開催は難しいと感じていました。下火になったからこそ、地域の皆さんが勢いをもたらしただと思えます」。そう話すのは浮嶋神社秋祭奉賛会会長由井正人さん(44)。五穀豊穣を願う牛渚のねり行事は市無形民俗文化財に指定されている。相撲練りや豊栄の舞など中子地方でも珍しい伝統行事。昨年は中止した子どもたちによる獅子舞も今年は開催できた。牛渚の獅子は小学校5年生から中学校2年生までが中心となつて舞う。浮嶋神社秋祭獅子係長の近藤恵太さん(32)に話を聞いた。

「当初は獅子舞を教えるだけの予定でした。練習を重ねるにつれ、子どもたちから『祭りでも獅子舞をしたい』という声が出てきました。今年の獅子舞の演舞は練習の成果を披露したいとい



由井 正人さん

う子どもたちの願いと、伝統を引き継いでいきたいという大人たちの思いが込められています」

有志で参加した三好真和さん(15)は小学校から獅子舞を始めた。「今年の太鼓は自分たちが教える役目でした。技術を伝えることは難しいですが、全力を尽くして獅子を舞う気持ち伝えること

はできました。来年も続けたい」と、伝統を受け継ぐことを誓った。ねり行事を見物した親子は「小さい頃から牛渚の獅子舞の太鼓の音を聞くと気持ちが高ぶります。自分の子どもにも経験してほしい」と、獅子舞の演舞に目を輝かせた。牛渚の獅子舞の伝統は今後も次世代の子どもたちに引き継がれ、留まることはない。

多くの地区が規模を縮小して開催した今年の秋祭り。伝統行事をやめるのは簡単で、続けるにはエネルギーが必要だ。さらに難しいのはその熱量を『共有』すること。周囲への共有。他地域への共有。次世代への共有。熱量の共有が『共感』へ変わり、伝統行事は受け継がれていくのだろう。

牛渚 Ushibuchi

伝統を引き継ぎたい、舞を披露したい。思いが重なった特別な日



近藤 恵太さん



宮本 春雪さん

静かに隊列をなし、軽トラックで神輿を運ぶ宇氣洲會の皆さんから熱気が伝わる。地方祭開催に向け、役員のみ参加とし、子どもには声をかけなかつた田窪地区。全ては、感染対策と伝統行事を両立するための判断だった。せつかくならんと、ただ神輿を巡回するだけではない、ある工夫が施されていた。緑色の紐で結ばれたシトラスリボンのキーホルダーだ。高須賀さんは「シトラスリボンを皆さん知っていただきたくてお願いしました。この活動は、社会復帰の心強い力になると信じています」と話す。南吉井小学校でPTA会長を務める高須賀さんは、同じく川上小学校のPTA会長、松本司さんが発起人とし



東 美鈴さん



伝統を次の世代へ力を蓄えよう、来年に向けて。

「新型コロナウイルス感染症対策を徹底しながら、神輿が巡回しております。秋を告げるお祭りの音楽とアナウンスが流れる。神輿に乗せた軽

て取り組む同プロジェクトに共感。役員全員のマスクにリボンを付けて、新型コロナウイルスに感染された人の社会復帰時に懸念される、差別や偏見の解消を願った。

「新型コロナウイルス感染症対策を徹底しながら、神輿が巡回しております。秋を告げるお祭りの音楽とアナウンスが流れる。神輿に乗せた軽

トラックが畦道を進む。「少人数で寂しいけれど、神輿を出すことだけでも意義があるのではと思います。現状で最善を尽くすことで、みんなが笑顔になれる祭り、地域になれたと讚えたい。獅子舞は2年のブランクがあります。取り戻すのは簡単なことではありませんが、保存会、総代会、宇氣洲會が力を合わせれば必ずできる」。高須賀さんは前を見据える。

主催者の思いは地域にも伝わっている。観覧した東美鈴さん(69)は「毎年神輿が見れるのを楽しみにしています。せつかくの晴天で獅子舞が見られないのは残念ですが、地域が賑やかになって元気をもらえました」と頬を緩めた。参加した宮本春雪さん(19)は「縮小はしましたが、伝統を残すことができました。僕たちのような若い世代がこれからも地域を盛り上げていけたら」と意気込む。「今まで寂しかったので、地域の皆さんも楽しみにしてくれている。一緒に笑い合えるお祭りを来年こそ」。鯉口と法被に身を包んで歩く皆さんは、来年に向けて力を蓄えるように歩調を強めた。



高須賀 啓治さん

田窪 Tanokubo

トラックが畦道を進む。「少人数で寂しいけれど、神輿を出すことだけでも意義があるのではと思います。現状で最善を尽くすことで、みんなが笑顔になれる祭り、地域になれたと讚えたい。獅子舞は2年のブランクがあります。取り戻すのは簡単なことではありませんが、保存会、総代会、宇氣洲會が力を合わせれば必ずできる」。高須賀さんは前を見据える。